

国語科が考える学びの価値

中村 麻里那 安 暁彦 小林 圭太 古屋 爽太郎

1 国語科が考える学びの価値

言葉を紡ぐ^{ハッ}て発見だ

2 学びの価値の設定理由

(1) 教科の特性から

本校国語科では、国語という教科特性を、「言葉を中心において学習する教科」と捉えている。そのため、生徒が会う言葉一つ一つと向き合い、その言葉について深く考察するような授業を目指してきた。これは、中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説国語編の「国語科の目標」に示されている「言葉による見方・考え方」を働かせることと関係付けられるものであり、国語科において育成を目指す資質・能力をよりよく身に付けることにもつながっていく。

また近年は、多様な他者との対話を基盤とし、生徒の思考力・判断力・表現力を育成するための授業開発を行ってきた。言葉による自己表現力を磨くことはもちろん必要であるが、多様な他者との関わりの中で生きる私たちにとって、対話は非常に重要なものである。生徒には、自分の考えをもって臨んだ多様な他者との対話を基盤として、思いや考えを伝え合う力を高めることや、言葉を手掛かりとしながら論理的に思考する力や判断力、表現力を育むことが必要であると考え。よって、自分の中で言葉を紡ぐというプロセスだけでなく、多様な他者との対話という視点も加えた上で、学びの価値のキーワードを「言葉を紡ぐ」とした。

さらに、学びの価値のもう一つのキーワードである「発見」には、あえて「ハッ」とふりがなを付けている。これは、本校研究部における学びの価値の基本的な考え方である「学びを通して得る肯定的な感情とその要因」を受けて、設定したものである。国語科では、授業の中で何らかの発見があった瞬間、すなわち「ハッとする」瞬間こそ、学びが生み出されているのではないかと考えている。「ハッと気付く」、「ハッと驚く」瞬間を授業の中に生み出すことで、その発見がなぜ生まれたか、つまり発見の要因を生徒が考えることにつながり、学びを通して肯定的な感情を得られるのではないかと考え、設定した。加えて、この「発見」のキーワードには、生徒が「ハッとする」瞬間を授業で生み出すことだけでなく、授業の参観者もそういった生徒の姿にハッと気付き、学びの価値について考えてほしい、という願いも込められている。

(2) 生徒の実態から

令和 4 年 6 月に行われた授業研究会で、「コピー作文の批評文を書く」という単元を実施した。第 3 学年の「書くこと」領域において、感動や発見をもたらした根拠や理由を伝えるために批評文を書く活動を設定し、生徒が「表現の仕方や論理の展開などを意識し、自分の考えが分かりやすく伝わる文章になるように工夫すること」、「自分の文章のよい点や改善点を見いだすこと」をねらいとした実践である。以下は、単元の最終時に行った振り返りの記述を整理し、表にまとめたものである。

	育成を目指す資質・能力	学習内容	学び方
自己	・今までよりも、他者を説得させられる文章が書けるようになった。伝わりやすい文章にするコツが分かった。 ・批評文のように、説得力をもたせる必要がある文章では、やはり具体的な根拠が重要だと実感した。具体的な根拠を用いた文章の書き方が身に付いたと思う。 (15人)	・三つの構成（頭括・尾括・双括）のメリットとデメリットを理解した上で、自分の伝えたいことが一番伝わる構成を選ぶ力が付いた。 ・読み手の興味を惹くために、どのような表現を使ったらよいのかを考えて、たくさん表現技法を学ぶことができた。 (13人)	・相手にアドバイスを送る時には、相手に心地よく伝えるために、自分の感想や考えの伝え方を工夫することが大切だと気付き、実践した。 ・人と交流することで、自分では気付かなかった良いところや改善点があった。交流は有意義なことだと実感した。 (5人)

<p>他者 や 事象</p>	<p>・文章を書いている、「うまく言葉にできない」という感覚があったので、これからはもっと語彙を増やして、いろいろな言い回しができるようにになりたい。</p> <p>・実生活では、例えば旅行に行ったときに見たもの、食べたものを批評し、友達に伝えることなどに生かせると思った。 (9人)</p>	<p>・友人の文章のよい点、改善点を見つけた力が付いた。改善点を伝えることは、お互いの国語の力を成長させることができると気付いた。</p> <p>・他の人に伝えようとするときほど、工夫しようという気持ちになった。読んでもらう相手がいることは、自分の文章が良くなるきっかけの一つだと実感した。 (18人)</p>	<p>・それぞれの文章から、人によって感じ方が様々あることを実感した。それが文章を書いたり読んだりする面白さだと思った。</p> <p>・文章をただ書くだけでなく、文章に対する意見を伝え合ったり、よい表現にするために話し合ったりしたこと、かなり深まったと思う。 (4人)</p>
------------------------	--	---	---

(第3学年4組生徒34名の記述の抜粋。複数の事柄について記述している生徒も見られた。)

記述の傾向として、「自己／育成を目指す資質・能力」と「自己／学習内容」について記述した生徒は多数見られ、それぞれ15人、13人であった。また、「他者や事象／学習内容」について記述した生徒が18人と一番多かった。一方で、「学び方」に関する記述を行った生徒は、「自己」5人、「他者や事象」4人とそれぞれ少なかった。学びの価値を実感できなかった生徒は見られなかった。

「自己／育成を目指す資質・能力」と「自己／学習内容」について記述した生徒が多数見られたことは、授業者がこの単元を通して身に付けるべきことを、単元の導入時から意識付けたことが起因していると考えられる。また、全体を見ると、他者とのつながりの中で自分の学びが生まれた、と振り返った生徒が一定数いたことも伺える。一方で、一番多くの生徒が記述した「他者や事象／学習内容」は、授業を通して「気付いた」ことや「実感した」ことについて述べている。これは、言葉による見方・考え方を働かせ、言葉を紡ぐプロセスの中で何らかの発見があったことを示していると考えられる。この結果を踏まえた上で、「言葉を紡ぐって発(ハッ)見だ」という学びの価値を、生徒が実感できるような国語科の授業開発を目指していく。

3 授業者が考える学びの価値を伝える工夫

(1) 「話したい」・「聞きたい」・「書きたい」・「読みたい」という意識を醸成する題材や導入

学びの価値を「言葉を紡ぐって発(ハッ)見だ」と定義したことから、まずは言葉を紡ぐことに前向きに取り組めるような題材の設定が望ましい。そのため、この学習活動に取り組みたいという意欲を喚起する題材や、この課題についてじっくり考えたいと思えるような導入などを意識しながら、授業開発を行っていく。特に、本校の研究基調で述べられている手立てⅠ①「生徒の経験、思いや考えに働きかける学習内容・活動」を目指すために、日常生活や社会生活に関連があり、生徒が自分ごととして捉えることのできる題材を精選して活用していく。これまでの国語科での取組を例として挙げると、水戸市内の碑文や歴史的資料(梅里先生碑、弘道館記、偕楽園記、種梅記、常陸国風土記)、学習者自身が行った行事の写真等を授業内で活用している。各資料とも生徒が少し足を延ばすことで目にしたり、自分の行事での体験を想起したりできるものである。このように、教科書の資料を使用するだけでなく、生徒の身近なものを題材として提示し活用することで、学校の授業で行っている学びと社会とのつながりを自覚する契機となることを目指していく。よって、生徒が「話したい」、「聞きたい」、「書きたい」、「読みたい」と思えるような題材の設定や導入の工夫を講じることで、他者との対話の中で自分の思いを何とかして相手へと伝えたいという意識が醸成されると考える。それをモチベーションの一つとして、生徒が学習活動に意欲的に取り組み、授業の中で「ハッとする」発見の瞬間を生み出していきたい。

(2) 生徒が主体的に取り組めるような言語活動や単元構成

本校研究基調における手立てⅠ②では、「肯定的感情を喚起する学びのデザイン」を設定している。これを受けて国語科では、授業展開や対話場面などを工夫しながら、言語活動や単元構成を考えていきたい。特に対話場面については、対話をすることで新たな視点や発想に気づき、言葉による見方・考え方を広げていくことができるようなタイミングで設定していく。また、表現の仕方の秘訣を協働的に導いていけるような活動の設定や、ペアからグループへの段階的な学習形態の工夫、ICT機器の活用なども、生徒が主体的に学習へ取り組める要因となると考えられる。単元ごとの育成すべき資質・能力にも関連させながら、生徒が主体的に取り組む、肯定的な感情を喚起できるような言語活動や単元構成を目指していく。